

『夜の寢覚』の大皇の宮考

——「心構へ」の機能を中心に——

池田 彩音

一 問題の所在

『夜の寢覚』の主題は、次に掲げる冒頭の一文によって示されている。

人の世のさまざまなるを見聞きつものに、なほ寢覚めの御仲らひばかり、浅からぬ契りながら、よに心づくしなる例は、ありがたくもありけるかな。

（『夜の寢覚』巻一・一五頁^①）

この物語の中心人物である寢覚の上は、男君との間に多くの子を儲けながらも、付かず離れずといった関係の中で苦悩する。『源氏物語』や、近い時代に作られた『狭衣物語』や『浜松中納言物語』が男性を中心人物とするのに対して、『夜の寢覚』は女性を中心人物にして物語を推し進める特徴がある。

『無名草子』は、『夜の寢覚』が寢覚の上を一貫して中心に据えて物語を展開させたことを指摘した、最も早い資料として多く引用される。その上、『夜の寢覚』の欠巻部を推定する上でも欠かせない資料である。その中に、次のような記述がある。

憎きこと、衛門督、弁の乳母などのもの言ひ。大宮（大皇の宮）の御心構へ、さも過ぎてうとまし。

（『無名草子』一三三頁^②）

左衛門督や弁の乳母が大君を擁護する立場から中の君（のちの寢覚の上）に対する悪評を立てたことと、大皇の宮が寢覚の上と男君の仲を裂くためにさまざまな画策を企てたことは、寢覚の上を大いに苦しめる。『無名草子』の「憎きこと」で取り上げられる寢覚の上と対立する人物たちは、寢覚の上を「噂」によって精神的に追い詰めていく。

特に大皇の宮の「御心構へ」は、物語第三部において寢覚の上

と男君に意識され、以降の展開に不可欠な要素である。物語を展開させる役割を負った大皇の宮とは、いったいどのような人物なのであろうか。

大皇の宮は朱雀院の後であり、帝と女一宮の母である。中巻欠巻部から登場しているため、不明な点もある。しかしながら、その存在感は色濃く、心情なども多く描かれている。

大皇の宮について、先行研究では、『源氏物語』の弘徽殿女御の影響が指摘されている^③。しかし、類似点の指摘に留まっており、十分な検討がされているとは言いがたい。また、物語の性質上、寢覚の上との関係から取り上げられる傾向がある^④。さらに、野村倫子氏は、大皇の宮が降嫁した皇女の母である点に注目し、他の物語や史実における皇女降嫁について考察する。その上で、大皇の宮が自らの不安定な地位ゆえに、婿である男君と寢覚の上の仲を裂き、婿となつている男君だけではなく、寢覚の上をも一族に取り込もうとしたとする^⑤。このように先行研究を概観すると、大皇の宮の描写を中心に取上げた考察は、ほとんどなされていない。

本稿では、大皇の宮と深く関わる「心構へ」の用例を検討し、物語を丹念に読み解く。その上で、大皇の宮の人物造型と物語展開との関連性を指摘する。また、国母という観点から、『源氏物語』の弘徽殿女御との影響関係についてもその差異を明らかにする。大皇の宮の人物造型が、いかに主題と関わって作り込まれているかを提示する。

二 中間欠巻部における大皇の宮

大皇の宮は、中間欠巻部において初めて登場する人物である。中間欠巻部の詳細を全て把握はできないが、現存部の記述から、中間欠巻部における大皇の宮の様子を推察できる。大皇の宮がどのような人物として物語に登場したかを把握するために、大皇の宮が中間欠巻部においてどのように描かれていたかをまとめておく。

第一に、大皇の宮は女一宮の男君への降嫁に大きく関わっている。

男君は寢覚の上と老閨白の結婚に衝撃を受け、寢覚の上への気持ちに慰むかと期待し、女一宮へと通い始める。

この時、男君は寢覚の上の姉の大君と結婚していた。大皇の宮はそれを知りながら、「あの姉（大君）は、もとより心ざし深からで、ありつかずと聞きはべりしかばこそ」（『夜の寢覚』巻三・二六五頁）と、大君と男君の夫婦関係がうまくいっていないことを理由に結婚を許したという。しかし、男君は寢覚の上への想いを断ち切れない。大皇の宮は、「すべて、おのが『世づいたるさまにて見たてまつらむ』と思ひかけけるが、いと悔しきなり」（『夜の寢覚』巻四・三八五頁）と後に語っており、当初は大皇の宮自身が女一宮の結婚を肯定的に捉えていたことが窺い知れる。

一方で女一宮は、結婚がうまくいかない可能性をはじめから見

据えていた。

昔より、「男君にとって寢覚の上は」かかる本意深き人とは聞こえき。また、え去らず添ひたる人「大君」ありしを、あながちにおぼし寄りもてなさせたまへる意りにこそあめれ

『夜の寢覚』巻五・五〇五頁

以前から男君が寢覚の上に深い思いを寄せていたことや、大君が妻として離れずにいたことを知っていたにもかかわらず、無理に結婚したのが間違だったという。さらに、女一宮の父朱雀院も、「さもこそ思ひ寄らめ、悪しうおぼしたちそめしなり」（『夜の寢覚』巻五・五二一―五二三頁）と、女一宮の結婚がうまくいかないことは予想もできのように、悪くも結婚を思い立ってしまったのだと、結婚に不安があったと語っている。

男君と女一宮の結婚後、大君は夫と女一宮を恨みながら亡くなってしまう。しかし、男君は寢覚の上を想い続けるため、男君からの女一宮への扱いは満足のいくものではない。大皇の宮は、男君と寢覚の上の仲を裂くため、動き出すのである。

第二に、大皇の宮は寢覚の上の宮中出仕を強く望んでいる。

帝は中間欠巻部において、宰相中将（もとの宮の中将）から中の君（寢覚の上）の琵琶の音が優れていることを聞いて中の君に興味を持ち、入内を持ちかけていた。しかし、中の君の父は聞き入れず、老閼白と中の君を結婚させたのだった。老閼白が亡くな

ると、帝は寢覚の上を内侍督として出仕させようとする。しかし、寢覚の上は故閼白の長女に出仕を譲り、帝の誘いを逃れる。その後、男君が、「内侍督のことをのがれにしかば、朱雀院にと構へたまふ」（『夜の寢覚』巻三・三〇三頁）と語っていることや、大皇の宮が寢覚の上に、「なほ、きこゆるに従ひて、院にさぶらひたまへ」（『夜の寢覚』巻三・二三五頁）と誘っていることから、大皇の宮は、夫である朱雀院への出仕を寢覚の上に勧めていたとわかる。

しかしながら、大皇の宮は寢覚の上との親交もあったらしい。

去年の冬ごろ、殿「故閼白邸」にて、「大皇の宮が寢覚の上を」あながちにまつはし、ひとへにのみもてなされたまひしに、

『夜の寢覚』巻三・二六九頁

詳しい経緯は不明であるが、中巻欠巻部から巻三のはじめまで大皇の宮は故閼白邸に滞在している。大皇の宮は故閼白邸で寢覚の上を強引に側に置き、一途に世話する場面があったらしい。寢覚の上は、男君との関係を思えば大皇の宮を恐ろしく思うものの、大皇の宮を避けるわけではないのである。

以上、大皇の宮の中間欠巻部での描かれ方を見てきた。大皇の宮は、女一宮の降嫁を朱雀院や女一宮が不安を抱えるにもかかわらず容認した。さらに、男君の寢覚の上への想いが絶える気配がないと知り、二人の仲を裂くべく、寢覚の上の宮中への出仕を勧

める。一方、寢覚の上との親交もあり、恨みの感情だけを抱いているわけではない。大皇の宮は、男君にも寢覚の上にも影響力を持ち、双方に働きかけることのできる人物として、物語において存在感を示している。

三 大皇の宮の「心構へ」

三―一 策謀する国母

次に、大皇の宮に特徴的な語である「心構へ」がどのように用いられているかを確認し、その機能について考察する。

「心構へ」は、およそ、気構えや、心積りをするこの意である。この物語の用例を見ると、企てや、策略といった意味合いが強い。『無名草子』が着目したように、『夜の寢覚』の「心構へ」の語は、七例全てが大皇の宮に関するものである。さらに、「構へ」の三例も全て大皇の宮に関わっている。また、動詞「構ふ」は八例中一例のみであるが、「おぼし構ふ」は七例中五例が大皇の宮と関わって用いられている。

『夜の寢覚』の大皇の宮を見ていく前に、影響が指摘されている『源氏物語』の弘徽殿女御について触れておく。弘徽殿女御も、策を企てる人物として描かれており、次のような記述が見える。

かく一所におはして隙もなきに、つつむところなくさて入り

ものせらるらむは、ことさらに軽め弄ぜらるるにこそは、と思しなすに、いとどいみじうめざましく、このついでにさるべきことも構へ出でむによきたよりなりと思しめぐらすべし。

(『源氏物語』賢木巻・②一四九頁)⁶⁾

右大臣が光源氏と朧月夜の密会を弘徽殿女御に告げた際、弘徽殿女御は憤慨しつつも、光源氏を陥れる好機と捉える。弘徽殿女御は息子の朱雀帝の立場を安定させるため、光源氏や東宮の勢力を退けようと画策する。これは後に光源氏の須磨流謫へとつながっていく。

さらに、橋姫巻でも弘徽殿女御の政治的な策謀が語られている。

源氏の大殿の御弟、八の宮とぞ聞こえしを、冷泉院の春宮におはしましし時、朱雀院の太后の横さまに思しかまへて、この宮を世の中に立ち継ぎたまふべく、わが御時、もてかしづきたてまつりたまひける騒ぎに、

(『源氏物語』橋姫巻・⑤一二五頁)

冷泉院の東宮時代、八の宮は弘徽殿女御に対立候補として担ぎ出されたという。弘徽殿女御の企ては失敗に終わるものの、弘徽殿女御自身の政争における主導性が窺える。

『源氏物語』の弘徽殿女御は、国母という立場に相応しく、政治的な能力の高い女性として描かれている。「構ふ」の複合語によって表された、策を企てる行為は、弘徽殿女御の政治への介入の積極性を描出していると言える。

三——帝との浮名を流される寢覚の上

それでは、『夜の寢覚』の天皇の宮の「心構へ」は、どのような機能を持つのであろうか。以下、用例に即しながら検討を進める。

『夜の寢覚』の天皇の宮の「心構へ」は、帝が天皇の宮の計画によって寢覚の上のもとに侵入し、寢覚の上を捕らえるという、いわゆる「帝闖入事件」を契機に用いられる。帝に捕らえられた事件そのものよりも、浮名を流されてしまうことを、寢覚の上は気にかける。

いとさしもありけるも、かかる人の御心構へ、名を流すべきも、ただかの人「男君」の御ゆかりぞかし

（『夜の寢覚』巻三・二九〇頁）

天皇の宮の「心構へ」による帝の闖入と、まだ起こっていない「名を流す」ことは、寢覚の上にとってほとんど同じ重さで語られていると考えられる。この用例の前には、ようやく帝から逃れ、世間の噂的にされることに思いを至らせる寢覚の上の心中

が語られている。

かかるたよりにことよせて、まづ参りたるさまに、世の人聞き言はむ、憂く、あはつけう、心憂きを、親兄弟も、『昔も今も、かかる名をのみ、色を変へつつ流すよ』と、うち聞きおぼさむ御心どもをはじめ、我が心のうちこそ、『ありがたくながれぬるぞかし』と思へ、かの御方ざまより言ひ流されむ、すべきかたあらじを、

（『夜の寢覚』巻三・二八八頁）

寢覚の上は、姉の夫であった男君とも以前噂を流された。『無名草子』が「衛門督、弁の乳母などのもの言ひ」として挙げていた部分である。寢覚の上には、この時の苦痛が残っているのであろう。浮名が流れることは、寢覚の上にとって避けがたいこととして捉えられている。

帝から翌朝手紙が届くと、寢覚の上は、「つひに、あいなく、名さへ流れぬべきこそ、今まで長らへにけるさへ悔しけれ。散らむも、むつかし。取り隠いてよ」（『夜の寢覚』巻三・二九二頁）と乳母子の少将に手紙を渡す。少将はその様子に、「つひに、宮（天皇の宮）の御心構へのありけるなめり」（『夜の寢覚』巻三・二九二頁）と思い寄る。寢覚の上の浮名が流れるようなことと、天皇の宮の「心構へ」が、事情を把握していないはずの人物からすぐに結び付けられている点で注目される。

寢覚の上はその後、故関白の長女の督の君に、「大皇の宮の御心構へ、今宵あさまじかりつること」〔夜の寢覚〕巻三・二九三頁を話し、宮中から退出する旨を告げる。

一方、思いを遂げられなかった帝は、大皇の宮に、「さはれ、をこがましきこと。世の聞こえも軽々しく、女房のなかにも散らしはべらじ」〔夜の寢覚〕巻三・二九六頁と、寢覚の上とのことが世間に知られるのも軽率なため、女房たちにも話さないつもりだと言う。しかし、大皇の宮は、「内の大臣〔男君〕に、いかで、上の立ち寄せたまひたりし気色、疾く聞かせて、思ひ疎ませむ」〔夜の寢覚〕巻三・二九七頁と、寢覚の上の予想通りに動き出す。

男君は、大皇の宮側の女房の帥の君から、帝と寢覚の上の件を聞かされる。しかし、事情を知る大皇の宮付きの女房の宣旨の君によって、寢覚の上の身の潔白を知ることとなる。

依然として帝の様子に不安を押さえきれない男君は、ついに寢覚の上のもとへと渡る。帝との噂やそれを聞いた自分の気持ち、帝の寢覚の上に執着している様子などを、寢覚の上に次々と話す。これを受け、寢覚の上は次のように思う。

「聞きやつけたまはむ」のあらましごとだに、よろづも忘れておぼえつるに、日をだに経ず、まづ漏らし聞かせたまひつらむ宮〔大皇の宮〕の御心の、かくおぼし構ふるとは心得ながら、なほめづらかに、憂く、疎ましきに、「いでや、かの

御心構へも、この人〔男君〕によるぞかし」と、「まいて、『うちとけてなむ』と聞きつけられたてまつりては、いかなることか出で来む」と、いみじく恐ろしけれど、

〔夜の寢覚〕巻三・三二二―三二三頁

大皇の宮が男君に言い聞かせるだろうとは予想していたものの、やはりめつたになくつらく、厭わしく思う。しかしながら、大皇の宮が企むのも、男君のせいなのだと考え、男君にうちとけて接していると大皇の宮から知られるのを恐れる。

大皇の宮の「心構へ」は、寢覚の上の浮名を流し、寢覚の上を苦しめる。その上で、寢覚の上に、男君との関係の深さを自覚させながらも、男君ゆえにつらい目に遭うのだと、寢覚の上から男君を遠ざけていく働きを持つ。

三―三 生霊の噂を流される寢覚の上

寢覚の上が宮中を退出してからも、大皇の宮の「心構へ」は続いていく。

寢覚の上の宮中退出後、女一宮は病に臥す。そこに、寢覚の上の生霊を名乗る物怪が現れる。男君は、「いとあさまじう。言ふこととて、まねびもてはやすことのなかに、つゆのまことはなきかな」〔夜の寢覚〕巻四・三八三頁と、生霊が偽物であると思う。しかしながら、寢覚の上の生霊の噂は広まることになる。

かかること〔寢覚の上の生霊の噂〕出で来て、宮〔女一宮〕のうちにも言ひののしり、世にもあさみ、後の宮〔大皇の宮〕のあはれにのたまはするやう、殿〔男君〕のおほいたるさまなど、あることも枝葉をつけ、なきことをもつきづきしう、かかる折は言ひ出づるを、くはしう人告げ申すに、〔寢覚の上は〕いとあさましう、胸ふたがりたまひぬ。

〔夜の寢覚〕 卷四・三八七—三八八頁〕

寢覚の上は、自分の生霊の噂に対する女一宮方や世間の騒ぐ様子、大皇の宮や男君の反応など、事実はそれ以上に、事実でないこともそれらしく言い広められているのを聞き、驚きあきれ、胸がつまるといふ。寢覚の上は、男君が生霊について、さぞかし疎ましく思っているだろうと誤解する。この後訪れた男君は、寢覚の上を氣遣つて生霊の噂について触れない。しかし、寢覚の上は、男君が噂を信じているから話さないのだとさらに誤解を深めていく。

寢覚の上が頼りにしている次兄の新中納言が訪れた際、寢覚の上は父のいる広沢に移る意向を告げる。

大皇の宮の御心おもむけも、恐ろしくのみあり、言ふかひなき賤の男まで、名をこそ先に立つといふなれ、〔中略〕〔女一宮の〕御心地のかからむほど、西山〔広沢〕に参りてあらばや』とこそ思ひはべれ。

〔夜の寢覚〕 卷四・四〇五頁〕

寢覚の上は、「賤の男まで、名を先に立つといふなれ」と言い、自分の浮名がこれ以上流れないよう望み、広沢に移りたいという。新中納言は寢覚の上に賛同し、寢覚の上は広沢に移ることになる。

寢覚の上が広沢に移ったと知り、男君は広沢を訪ねる。しかし、寢覚の上は男君に会おうとしない。その後、女一宮は快方に向かうが、大皇の宮の「心構へ」は男君からも意識される。

〔女一宮方の〕あまりの御もてなし、心構へのいと心憂き御あたりにて、げに人〔寢覚の上〕のため、世の音聞き心憂きことを言ひ出でて、本意のこと逆へられたるは、妬く心憂きわがかな。

〔夜の寢覚〕 卷四・四二三頁〕

寢覚の上が広沢に移り、自分を避けるようになったのは生霊の噂が広められたからだ、大皇の宮を中心とする女一宮方の「心構へ」に対し、男君はつらく思う。

その後、寢覚の上は病に苦しみ、ついに出家を志すようになる。寢覚の上は、以前男君との噂が長兄や姉の周囲で流された時に、出家してしまえば良かったのだと思ひ、故関白に先立たれたことに思いを馳せる。さらに、「まいて、憂きをもつらきをも尽

させず思ひ知り、疎ましげなる名をさへ流し添へ」(『夜の寢覚』巻五・四三二頁)と、生霊の噂まで立ったことを悔やむ。寢覚の上の出家の決意には、大皇の宮の仕組んだ生霊の噂が関わっているのである。

寢覚の上の出家の意思を伝え聞いた男君は、急遽広沢を訪れ、次のように寢覚の上を責める。

「(中略)おのが怠りならぬに、いと憂き御ゆかりの御心構へは、みなおぼし知る節々もありなむを、ことづけて、やがておぼし捨てられむとおぼしける御心」を、泣く泣く恨みたまふに、

『夜の寢覚』巻五・四五〇頁

自分の落ち度ではないのに、大皇の宮の「心構へ」にかこつけて出家を思い立った寢覚の上を、男君は泣きながら恨む。生霊の噂について寢覚の上に何も言わなかったことを弁明し、出家をやめさせようと寢覚の上を説得する。

その後、男君によって父入道に二人の仲を打ち明けられ、寢覚の上は自身の懷妊をも見顯される。出家の願いは叶わず、帝や大皇の宮に対する不安も絶えない寢覚の上は、次のように語る。

このたび、百敷のうち厭ひ出でしよりして、いかばかりかは憂さもつらさも思ひ知らるること多かりつる。今はと召され

むほど、後の宮(大皇の宮)の御心構へなど思ひやるに、ゆしく、疎ましければ、いかがはせむ

『夜の寢覚』巻五・四七七頁

寢覚の上は、出家すれば男君との男女の関わりを離れ、清らかな関係として、頼ることができると考えていた。しかし、出家が叶わない今、帝にまたいつ召されるか知れず、大皇の宮からの策謀への不安も絶えないのである。寢覚の上の出家への願望を残したまま、物語は末尾欠巻部へと続くことになる。

以上、大皇の宮の「心構へ」の用例を物語に沿って見てきた。大皇の宮の「心構へ」は、いわゆる「帝闖入事件」と寢覚の上の生霊の噂に関わるものである。

寢覚の上はあらぬ噂を大皇の宮に立てられ、追いつめられている。『夜の寢覚』では、世間に対する意識への関心が強く描かれている。大皇の宮の「心構へ」は、寢覚の上の世間に対する意識に働きかけ、苦しめていくのである。

四 国母に似つかわしくない人物造型

「三——策謀する国母」で述べたように、『源氏物語』の弘徽殿女御の策略は、政治的なものとして語られていた。一方、『夜の寢覚』の大皇の宮の画策は、寢覚の上に世間体を意識させ、内省を促す機能を持つ。この差異は、『源氏物語』とは異なる、『夜

の寢覚』の特徴を物語っているのではないだろうか。つまり、寢覚の上という一人の女性を中心人物として一貫して描くため、物語はあくまでも寢覚の上の苦悩を引き出すとするのである。

弘徽殿女御が政治を執り行う能力がある人物として造型されていることは、『うつほ物語』の後の宮からの影響とともに、漢語を用いることや、「いとおし立ちかどかどしきところものしたまふ御方にて」（『源氏物語』桐壺巻・①三六頁）と、私の強い性質が語られていることから指摘されている。

『夜の寢覚』の天皇の宮の人物造型は、どうであろうか。結論を先に言えば、天皇の宮は、国母という立場に相応しくない造型がなされている。

第一に、天皇の宮の「軽らか」な振る舞いが挙げられる。

天皇の宮は、男君との関係を思えば寢覚の上が憎いものの、寢覚の上個人に対しては好意的でもある。そのため、寢覚の上が天皇の宮のもとに訪れたか帝に聞かれた天皇の宮は、次のように答える。

「いと見まほしき心ざまの、すずろに恋しくはべれば、夜ごと、に、『渡れ』とはべれど、『心地悪し』とて。そのままに、かしこにこそ渡りてはべりしか」

（『夜の寢覚』巻三・二六六頁）

天皇の宮は、寢覚の上を毎晩のように誘い、断られると自分から

寢覚の上のもとに出向いたという。帝は、「いと軽らかに」『夜の寢覚』巻三・二六六頁）と天皇の宮の行動を軽率だと咎めかける。

また、天皇の宮は寢覚の上の機嫌を取るため、寢覚の上の継娘の督の君をひいきにし、督の君がいる登花殿にも気軽に訪れていた。

「関白の上（寢覚の上）を、我がものと靡かし果てむ」の御心どりに、内侍督（督の君）を、とりわきかたびかせたまふさま、いと頼もしげにて、「いましばしありて、我が位をも譲らむ」などのたまはせて、語らはせたまひつつ、軽らかに登花殿に渡り通ひなどせさせたまふ。

（『夜の寢覚』巻三・二六三―二六四頁）

天皇の宮が寢覚の上を味方にしようとし、督の君をひいきにする背景には、中宮との不和が語られている。

「中宮は」いとよろづのことに、心得重りかに、のどかに、ありがたきところすぐれておはしまいて、天皇の宮は、ふさはしからずと、思ひきこえさせたまふほどに、おのづから、いとしも同じ御心ならず。

（『夜の寢覚』巻三・二六三頁）

中宮は全てに對して考えが重々しく、落ち着いていて、めったにないようなところが優れている。中宮に欠点があるわけではなく、大皇の宮はその優れた中宮の性質とは合わないと感じている。中宮の「心得重りか」な性質は、特に大皇の宮の「軽らか」と対照的である。

女一宮の性質も、「母宮の御心には、いとたとしへなく重りかにおはしまいて」（『夜の寢覚』巻五・四八〇頁）と、大皇の宮とは比べようもなく重々しく落ち着いているとされる。大皇の宮は重々しくはなく、「軽らか」に行動する人物として描かれている。

男君と寢覚の上の仲を裂くことができないとわかると、大皇の宮は女一宮を男君のもとから引き取ろうと考えるようになる。大皇の宮は朱雀院に對し、女一宮の引き取りを提案し、男君に再び逢わせないようにしようと言う。しかし、朱雀院は、「それ音聞きいとけしからず。なほなほしきことなり」（『夜の寢覚』巻五・五二二頁）と、外聞の悪さと身分の低いような行動であることを理由に反對する。朱雀院は、皇女である女一宮がそこまで疎かにされるはずはないと、男君に任せるよう大皇の宮をなだめる。

大皇の宮は、帝や院から非難されるような軽率さが描かれており、皇族と臣下を差異化する気位の高さや、外聞に對する配慮が欠けている。それは、中宮や、娘の女一宮との対照的な性格付けによっても強調されている。

第二に、大皇の宮は身分に比して不自然なほど、他者に親しみ深さを見せている。その親しみやすさは、寢覚の上への思いを帝

が大皇の宮に打ち明けるきっかけとなっている。

「大皇の宮は」親と申しながらも、ものにいと気高く、もの遠くはおはします、いとけ近う、わららかにのみおはしますに、「帝は」すこしうちとけて、

（『夜の寢覚』巻三・二五〇頁）

大皇の宮は、親と言つても、さほど気品高く、近寄りがたいわけではなく、親しみやすく、陽気な性格であるという。帝の思いを知つた大皇の宮は、寢覚の上を帝に見せようと企て始める。大皇の宮の親しみやすい造型が、物語を展開させる要素の一つとなっているのである。

さらに、大皇の宮の親しみ深い性質は、寢覚の上を帝に見せるという計画においても機能している。

大皇の宮の計画通り、帝は御帳台の内に隠れ、弘徽殿に訪れた寢覚の上の姿を垣間見る。大皇の宮は、寢覚の上の姿を帝によく見せようと、「長恨歌の絵」（『夜の寢覚』巻三・二五二頁）を見せるのを口実に、寢覚の上の近くに火を寄せる。寢覚の上は、人の気配を感じ、大皇の宮の「あまりけ近き過ぎたる御もてなし」（『夜の寢覚』巻三・二五六頁）に、女房などに見られているのだからと退出する。寢覚の上の不審に思われるものの、大皇の宮の強引なまでのうちとけた態度は、帝に寢覚の上を見せるという目的を果たしたのであった。

帝は寢覺の上を垣間見し、ますます執着することになる。大皇の宮が弘徽殿から退出する意向を帝に伝えた際、帝は大皇の宮が寢覺の上のもとへ自ら出向いたという軽々しい行動（前掲、『夜の寢覺』巻三・二六六頁）に促されるように、自身も寢覺の上に直接対面したいと大皇の宮に漏らす。大皇の宮は、これを受けて寢覺の上と帝を逢わせる計画を立てる。

この計画においても、大皇の宮は寢覺の上に親しみ深く接する。大皇の宮は、「明日の夜はまかでなむとするを、心のどこにきこえさすべきこともはべり、かならず渡りたまへ」（『夜の寢覺』巻三・二六七頁）と寢覺の上に伝える。寢覺の上は、大皇の宮の「あまり今めかしくまづはしたてさせたまふ」（『夜の寢覺』巻三・二六七頁）様子に落ち着かず、断る。しかし、大皇の宮が「かへすがへす恨」（『夜の寢覺』巻三・二六八頁）み言を告げるため、仕方なく夜がすっかり更けてから参上する。参上した寢覺の上に対して、大皇の宮は、「いみじう若やかに、今めかしう、契り語らはせたまふ」（『夜の寢覺』巻三・二六八頁）と、親しげに話しかける。そのうち、帝を呼び入れるために宣旨の君という女房一人を残し、大皇の宮は席を外す。この後、計画通り帝が部屋に侵入し、寢覺の上を捕らえることになる。

寢覺の上はなんとか難を逃れた後、もはや宮中にはいられないと思い、男君を頼り宮中を退出する。しかし、大皇の宮の親しみ深い扱いを思えば、自分が大皇の宮の立場であつても良いと思うはずがないと、寢覺の上は後ろめたく思う。

〔大皇の宮が〕うらもなく語らひつけられきこえたりしほどだに経ず、御構へをも逃ぐるやうにて、「男君に」うちとけ靡き寄らむ、我にてもよろしく思ふべきことにてもあらぬに、

〔夜の寢覺』巻四・三五〇頁〕

大皇の宮の親しみ深い態度は、寢覺の上を帝に逢わせる計画に効果的に描かれている。しかしながら、大皇の宮が寢覺の上に対して隔てなく言い寄り親しくなったことについては、あくまでも大皇の宮の善意として寢覺の上に捉えられている。そのため、大皇の宮を裏切るような男君との関係が、後ろめたく感じられるのである。大皇の宮が寢覺の上に対して親しみ深く接していたことは、寢覺の上が男君を遠ざける要因ともなる。

五 まとめ―人物造型と物語の展開方法をめぐって―

『夜の寢覺』の大皇の宮と、『源氏物語』の弘徽殿女御は、策謀する国母として、一見類型的な人物のように思われる。しかし、物語の描写を丁寧にとどつていくと、その造型には確かな違いがあることがわかる。『源氏物語』の弘徽殿女御の積極性は、政治的能力の高さによって裏付けされたものであった。一方、『夜の寢覺』の大皇の宮の積極性は、国母という立場を顧みない、軽率さから導き出されたものである。このような人物造型の違いは、策略の性質の差としても表れている。

第二節で検討した中間欠巻部における天皇の宮の行動を振り返ると、女一宮降嫁については、女一宮ほどには深く懸念せず、むしろ積極的であった態度が語られていた。これは、「軽らか」と語られる天皇の宮の人物造型と関わっているだろう。さらに、寢覚の上に出仕を勧めながらも、親しげに関わる態度は、物語第三部以降にも引き継がれていると言える。

『夜の寢覚』では、「噂」によって寢覚の上の苦悩を引き出し、男君とのあやにくな仲を語る。そのために、天皇の宮の「心構へ」は、寢覚の上の浮名を流すよう仕組まれ、寢覚の上に不安を与え続けていく。『夜の寢覚』は、物語を展開させるのに相応しく、国母としては似つかわしくない人物造型を天皇の宮に与えた。このような人物造型は、寢覚の上へと収斂していく物語を描くため、『夜の寢覚』が用いた方法の一つだと考えられる。

注

- (1) 『夜の寢覚』の本文の引用は、全て鈴木一雄氏『夜の寢覚 新編日本古典文学全集28』（小学館、一九九六年）による。なお、論者による注を（ ）で示した箇所がある。
- (2) 樋口芳麻呂氏他『松浦宮物語 無名草子 新編日本古典文学全集40』（小学館、一九九九年）。論者による注を（ ）で示した。
- (3) 藤田徳太郎氏「夜の寢覚物語について」（藤田徳太郎氏・増淵恒吉氏『校註夜半の寢覚』中興館、一九三三年、五二〇頁）は、「天皇宮が弘徽殿に住んでゐるのは、源氏物語の弘徽殿女御を思ひよそへたのであらうか。天皇宮と弘徽殿女御とは、その性格に似た所がある」と述べている。鈴木弘道氏『平安末期物語についての研究』（赤尾照文堂、一九七一年）は、天皇の宮の人物造型に、弘徽殿女御に加え、式部卿宮の大北方（紫の上の継母）の投影があるのでないかとする。しかしながら、鈴木氏の示された系図（四六五頁）には不備もあり、再度の検討が必要であると考える。本稿では、国母という立場の一致から、弘徽殿女御との影響関係を取り上げる。
- (4) 永井和子氏「寢覚物語の「中の君」——男性主人公から女性主人公へ——」（『続寢覚物語の研究』、笠間書院、一九九〇年）、乾澄子氏「夜の寢覚」——（母）なるものとの訣別——」（『古代文学研究 第二次』二、一九九三年一〇月）。
- (5) 野村倫子氏「夜の寢覚」の天皇の宮——后腹皇女の降嫁を巡って——」（『平安後期物語の新研究——寢覚と浜松を考える』新典社、二〇〇九年）。
- (6) 『源氏物語』の本文の引用は、全て阿部秋生氏他『源氏物語 新編日本古典文学全集20—25』（小学館、一九九四年——一九九八年）により、巻・冊数・頁数を示した。
- (7) 乾澄子氏「夜の寢覚」——（母）なるものとの訣別——」（『古代文学研究 第二次』二、一九九三年一〇月）。
- (8) 林田孝和氏「弘徽殿女御私論——恵のイメージをめぐる——」

—(『國語と國文學』六一—一二、一九八四年十一月)、沼尻利通氏「物語の国母—『うつほ物語』『源氏物語』を中心に—」(『日本文学』五一—九、二〇〇二年九月)、内藤英子氏「後の宮の造型—『うつほ物語』から『源氏物語』へ」(『古代文学研究 第二次』一七、二〇〇八年一月) など参照。

(9) 永井和子氏(「寢覚物語の「中の君」—男性主人公から女性主人公へ」『続寢覚物語の研究』、笠間書院、一九九〇年、六四—六六頁)は、大皇の宮に用いられている「今めかし」の語に注目し、『夜の寢覚』の「今めかし」の用例十例のうち五例までが「何らかの形で男女の仲と関係があるようである」とし、「上記の「大皇の宮に関わる」二例の「今めかし」も、単に現代風というよりも男女の仲についてのモダンな感覚をいったものと考えてよからうと思う」と述べる。本稿では大皇の宮から寢覚の上に対する同性愛的な感情までは想定しないが、大皇の宮が非常に親しい関係として寢覚の上に接していることは確かである。

(いけだ・あやね 本学大学院博士後期課程)